

**目的** 住宅に保有される生活物資の総容積と住宅にとられる建築的収納空間および収納家具空間の合計量との関係が論じられたことは殆んどない。本論ではこれらの関係を収納率 $\tau$ で表わすことを提案し、具体例により収納システムの解明の一つの論理的方法を提示する。

**解析** 生活物資の総量を $\Sigma Q$ 、建築的収納空間の総容積を $\Sigma V_1$ 、収納家具の総容積を $\Sigma V_2$ とすれば、 $\Sigma V_1 + \Sigma V_2 = \tau \Sigma Q$ が成立すると仮定する。  $\tau = 1.0$  は収納が適正に行われている状態を示すが、一般には $\tau$ は1.0より小さい値をとる。すなわち $\tau$ は収納相の一端を示す指標となる。こゝに男子学生または女子学生が住む核家族の都市的独立住宅を夫々80件をとり、 $\Sigma V_1$ および $\Sigma V_2$ を計算し、それらと住宅面積との関係を求める。また先に求めた法一般住宅660件のモノ保有のパターンより保有量をグループ化し、グループの位置づけを代表する特定品目を利用して、男子学生家庭の約40件について最大保有のグループとそれに準ずる保有グループに大別し、住宅面積別に収納空間保有を検討する。

**結果** 保有やや小なるグループでは住宅面積が小になるほど家具収納が大になり、保有最大のグループでは住宅面積が小になると家具収納だけで収まるが、 $\tau$ はより小なる値となり収納相に問題をきたす状態に落ちていることが推察された。 —以上—

\*本小論は協働研究(著者, 沖田富美子・日本女大, 塩谷寿翁・大阪工大, 一棟宏子・樟蔭女大, 中島善代子・三重大学)の一部であるが、未だ全体討議を至っていないので単独発表とする。

注: 一棟宏子, 外上記4名, 保有パターンによるモノ保有の分析—住宅の収納空間標準化に関する研究(その7)—, 建築学会講演梗概集, S 61年, 8月。